

Japan International Education Society



日本国際教育学会

〈学会創立 30 周年記念〉

# 第 31 回研究大会

## 開催要項

2020 年 9 月 5 日（土）・ 6 日（日）

会場：北海道立道民活動センター  
かでの 2・7

## 第31回研究大会開催要項

### 1. 大会開催日時

2020年9月5日（土）9時30分 ～ 9月6日（日）15時

### 2. 大会会場(札幌「かでの2・7」)

①会場「北海道立道民活動センター かでの2・7」10階フロアー  
札幌市北区北2条西7丁目（会場 TEL011-204-5100）  
開催室5室（1010・1020・1030・1040・1060）

②大会会場は通例大学で開催しますが、今大会は、参加者の交通便宜を考えて、札幌駅近くの「かでの2・7」という公共施設で開催することにしました。

③札幌への移動は、全国各地から新千歳空港への直行便が出ているので便利です。

### 3. 主催

学会大会: 日本国際教育学会

なお公開シンポジウムのみ、日本国際教育学会と「北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター」との共催となります。

### 4. 基本的なプログラムの流れ

1日目: 9月5日（土）

9時30分～11時30分	自由研究発表 I
12時30分～14時30分	課題研究 I
14時45分～16時45分	公開シンポジウム
17時00分～18時00分	総会
18時20分～20時20分	懇親会

2日目: 9月6日（日）

9時30分～11時30分	課題研究 II
12時30分～14時30分	自由研究発表 II

### 5. 公開シンポジウムと課題研究 I・II のテーマ(詳細後述 18 番・19 番・20 番)

#### ①公開シンポジウム

【テーマ「共生社会における先住民族政策とはーアラスカと北海道の結節点ー」】

#### ②課題研究 I

【テーマ「民族共生とアイデンティティ形成」】

#### ③課題研究 II

【テーマ「SDGs の展開と開発途上国の教育実践」】

## 6. 大会プログラムと開催室

9月5日(土)

時間	プログラム	会場かでの2・7の開催室
9:00~9:30	受付	10階通路
9:30~11:30	自由研究発表Ⅰ	1010室・1020室・1030室
11:30~12:30	昼食休憩	
12:30~14:30	課題研究Ⅰ 【テーマ「民族共生とアイデンティティ形成」】	1060室
14:45~16:45	公開シンポジウム 【テーマ「共生社会における先住民族政策とはーアラスカと北海道の結節点」】	1060室
17:00~18:00	総会	1060室
18:20~20:20	懇親会	

9月6日(日)

時間	プログラム	会場かでの2・7の開催室
9:00~9:30	受付	10階通路
9:30~11:30	課題研究Ⅱ 【テーマ「SDGsの展開と開発途上国の教育実践」】	1030室
11:30~12:30	昼食休憩	
12:30~14:30	自由研究発表Ⅱ	1010室・1020室・1030室

理事会

9月5日(土)

時間	プログラム	会場かでの2・7の開催室
11:40~12:20	理事会	6階和室すずらん

※自由研究発表の申込状況等によりプログラム内容は若干変更になることがあります。

## 7. 会員控え室

会員控え室は、「かでの2・7」の1040室にご用意しています。コーヒー・紅茶・緑茶湯茶・菓子等をご用意しておりますので、ご自由に利用ください。

## 8. 参加費

学会大会:2000円(学会員および当日のみ参加者を含めて一律となります。)

公開シンポジウム:無料(「共生社会における先住民族政策とはーアラスカと北海道の結節点ー」)

懇親会 :5000円(学会員以外もご参加できます。)

## 9. 自由研究発表の申込み期間と申込み方法

### ①自由研究発表の申込み期間

プログラム作成・公表を早くするために、自由研究発表の申込み期間は例年よりも少し早めて、4月1日(水)～5月31日(日)を募集期間としました。今からご発表の準備をして頂ければ幸いです。

②9月5日(土)と9月6日(日)のどちらかしか都合が合わない場合には、ご希望にそえるよう調整しますので、実行委員会にご相談願います。

### ③申込み方法

発表申込み・参加申込み等は、学会専用ホームページから入力します。

日本国際教育学会ホームページ <http://www.jies.gr.jp/>

④発表機器のPC等が必要な場合は、発表申込時にご連絡願います。

⑤日本最北北海道の大会であるため、大変遠方ではありますが、ぜひ積極的に自由研究発表の申込みをして頂き、大会を盛り上げて頂ければ幸いです。

## 10. 自由研究発表の発表時間とお願い

①発表時間 20分、質疑応答 10分で、合計 30分となります。

②自由研究発表申込者は、8月10日(月)までに、要旨をお送り頂きます。発表申込者には、要旨集作成要領を別途お送りします。

③プログラム公表後(6月末頃)は、発表時間変更は原則としてできませんのでご留意願います。

④当日発表資料は、各自で40部ご用意願います。

## 11. 大会参加申込み

大会参加は、当日参加も受け付けておりますが、できるだけ8月17日(月)までに申込みをして頂ければ幸いです。

懇親会参加者も、宴会場予約の関係から8月17日(月)までに事前申込みをして頂ければ幸いです。

## 12. 大会当日受付場所

会場「かでの2・7」の10階通路で受付を行います。

## 13. 当日昼食

会場「かでの2・7」2階に「軽食喫茶CAFÉ DE MADEL」(電話011-251-7220)があります。また北側隣ビル地階にも、食堂があります。

近くにコンビニもあります。昼食は、各自でお願いいたします。

## 14. 懇親会場

会場「かでの2・7」北側隣にある「中村屋旅館」の宴会場 会費は5000円です。

〒060-0003 北海道札幌市中央区北3条西7丁目1-1 (電話011-241-2111)

## 15. 後援

北海道, 北海道教育委員会, 札幌市教育委員会, 北海道立北方民族博物館, 独立行政法人国際協力機構, 公益社団法人北海道国際交流・協力総合センター, 公益社団法人北海道アイヌ協会, アラスカ姉妹都市(千歳市・帯広市・根室市・紋別市・佐呂間町・天塩町), 北海道国際理解教育研究協議会, 北海道新聞社, 読売新聞北海道支社, 朝日新聞北海道支社, 毎日新聞北海道支社, NHK 札幌拠点放送局

## 16. 近くの資料室および観光施設

①「かでの2・7」館内には、「北海道立アイヌ総合センター」もあり、アイヌ文化の資料展示室もあります。

### ②近隣施設

200メートル東に、北海道博物館(旧北海道庁赤れんが庁舎)

100メートル西に、北海道大学植物園

300メートル北西に、JRタワー38階展望室、札幌らーめん共和国

400メートル南東に、大通り公園+テレビ塔

800メートル南東に、札幌時計台

2.6キロ北東に、サッポロビール博物館

5.3キロ西に、札幌オリンピックミュージアム、  
などがあります。

③北海道白老町に「国立アイヌ民族博物館ウポポイ」(民族共生象徴空間)が2020年4月からオープンします。

④千歳市の「サケのふるさと千歳水族館」、「さっぽろ雪まつり資料館」、支笏湖、など、札幌市近郊に観光施設がたくさんあります。

## 17. 事務局連絡先

〒085-8580 釧路市城山1-15-55 北海道教育大学釧路校

○大会実行委員会メール [nihonkokusai31@gmail.com](mailto:nihonkokusai31@gmail.com)

○大会実行委員メール

玉井 康之 [tamai.yasuyuki@k.hokkyodai.ac.jp](mailto:tamai.yasuyuki@k.hokkyodai.ac.jp) / [tamaiyasuyuki@icloud.com](mailto:tamaiyasuyuki@icloud.com)

090-4875-3870 (主線) / 011-778-0897 (大学)

川前あゆみ [kawamae.ayumi@k.hokkyodai.ac.jp](mailto:kawamae.ayumi@k.hokkyodai.ac.jp)

0154-44-3316 (主線・大学) / 090-3462-6773 (携帯)

\*\*\*\*\*

## 18. 公開シンポジウム

### 公開シンポジウム

#### 「共生社会における先住民族政策とはーアラスカと北海道の結節点ー」

##### 趣旨

アラスカ州は、住民の4分の1が先住民族であり、また極寒の北方圏に位置していたために、開拓者である白人が先住民族の生活様式を取り入れてきた。また歴史が浅く、旧ロシア領を買い取ったアラスカ州は、南部48州の開拓の反省も含めて独自の先住民族政策がとられてきた。この様な歴史的経緯もあって、白人が先住民族を排除するだけでなく、先住民族と一定程度共生してきた文化がある。このためアラスカ州政府も先住民族と共生する政策をとり、また教育政策においても先住民族を理解する政策や教育活動が進められた。

アラスカ州では、アラスカスタンダードを先住民族と教育関係者共同で作成して行動規範を推奨したり、アラスカ州での教員資格としてアラスカスタディを付加するなど、独自の・先進的な内容を有しており、民族共生の視点に基づいた先住民族研究の先進的モデルを提示していると言える。本シンポジウムでは、アラスカ州の歴史的・文化的背景を踏まえながら、このアラスカ州の政策と教育活動の特徴や課題を明らかにすることを目的とし、以て日本のこれからの先住民族研究の参考事例として位置づけていきたい。

本シンポジウムでは、アラスカ留学経験がある3人の研究者に報告をお願いし、文化人類学・民族教育・へき地教育のそれぞれの立場からアラスカの先住民族政策と民族共生のための教育の特徴と可能性をご提案頂く予定である。

##### 〈報告者〉

①近藤祉秋（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

「アラスカ先住民族コミュニティにおける学校運営と文化継承活動」

②伊藤太陽（Center for Human Development, University of Alaska Anchorage）

「アラスカ先住民族教育の歴史から考える民族共生」

③玉井康之（北海道教育大学）

「教師教育におけるアラスカスタンダードの合意形成と教材づくり」

##### 〈指定発言〉

岩崎久和（アラスカアンカレッジ市内小学校教諭・元アラスカ領事館職員）

「アラスカの小学校現場から見た共生社会」

##### 〈司会〉

牛渡 淳（仙台白百合女子大学）

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

## 19. 課題研究 I

### 課題研究 I

#### 「民族共生とアイデンティティ形成」

##### 趣旨

近代以降に見られる国民国家 (Nation State) への志向は、教育基本法において「教育は、(略) 国民の育成を期して行われなければならない (1 条)」と明文化されるように、国家の主要な任務の 1 つに公教育における「国民」の育成を数えるようになった。国民としてのアイデンティティ形成を公教育に求める一方で、多民族国家カナダは少数民族の民族としての教育の権利を憲法レベルで保障し、あるいはオーストラリアをはじめとするいくつかの国のように、多文化主義政策を公教育に反映させる例も少なからず見受けられる。こうした社会的背景もあって、国民国家における国民の育成という公教育の目的は、制度設計当初は想定し得なかった他国人あるいは他民族の存在とそのアイデンティティ形成への希求の間であって、調整を余儀なくされていると述べても過言ではない。

国民としてのアイデンティティの形成、それ以外を公教育に容れぬ時代は過ぎ去り、民族としてのアイデンティティの形成をも公教育に容れることの是非が問われるパラダイム・シフトの起こりが垣間見える。それは、単に制度設計だけでなく、多文化の共生をコミュニティへ容れるシチズンシップの醸成を公教育の内容とすることも当然含まれる。東京オリンピック・パラリンピック開催で世界中の人びとが来日する本年、国民として、あるいは民族としてのアイデンティティ形成をシンポジウムのテーマの 1 つとすることの意義は少なくない。

本課題研究では以上のような社会的背景を踏まえて、国民国家におけるマイノリティの置かれた状況について 3 つの事例報告を受ける。栗田梨津子氏からはアボリジナルのアイデンティティ形成の問題について、新関ヴァッド会員からはインドにおける少数民族が抱える教育問題について、森下一成会員からは日本における「沖縄」のアイデンティティについて、それぞれマイノリティによる民族としてのアイデンティティ形成に関する現状と課題を明らかにし、国際教育学の方法を考える上での議論の出発点とすることを目的としたい。

##### 〈報告者〉

①栗田梨津子 (神奈川大学)

「アボリジナルのアイデンティティ形成の問題 (仮)」

②新関ヴァッド郁代 (産業能率大学・非常勤)

「インド少数民族・モンパ族の教育と民族アイデンティティにおける課題」

③森下一成 (東京未来大学)

「琉球民族のアイデンティティと沖縄におけるシチズンシップ」

〈司会〉森下一成 (東京未来大学)

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

## 20. 課題研究Ⅱ

### 課題研究Ⅱ 「SDGs の展開と開発途上国の教育実践」

#### 趣旨

本課題研究では、開発途上国と日本との国際協力関係を通して SDGs (Sustainable Development Goals) の具体的な実施のあり方を模索する。多様性と包摂性のある持続可能な社会の実現のため、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」には 17 の目標と 169 のターゲットから成る「持続可能な開発目標 (SDGs)」が示されている。そこで、日本が開発途上国において紹介可能な教育実践例を取り上げ、実践現場の具体的な取り組みに即して SDGs を考えてみたい。開発途上国の中には日本の教育プログラムに強い関心を寄せているところも多いが、日本から見た開発途上国支援と、開発途上国から日本に期待する教育技術や教育内容が相互に融合することは SDGs の実施やパートナーシップの持続性にとって重要である。このような関係性がある初めて日本の SDGs の実践がより有効なものとなっていくのではないかと。このような課題認識から、本課題研究では開発途上国と日本の国際協力関係の実践的なあり方をとらえつつ、SDGs の今後の展開のあり方と条件を検討してみたい。

#### 〈報告者〉

- ① 川前あゆみ (北海道教育大学)  
「開発途上国と日本のへき地教育の国際教育貢献の役割」
- ② 小野豪大 (ジモノ工房プロジェクト・北海道教育大学非常勤講師)  
「ラオスにおける教育改善の実践と国際教育貢献」
- ③ 佐藤秀樹 (公益社団法人青年海外協力協会・桐蔭横浜大学非常勤講師)  
「SDGs と教育開発— “JICA 地球ひろば” の実践から」

#### 〈司会〉

白幡真紀 (東北大学)

\*\*\*\*\*

21. 「かでのる2・7」会場図と写真



「北海道立道民活動センター かでのる2・7」 ホームページ参照  
<http://homepage.kaderneru27.or.jp/intoro/access/index.html>

発表会場内写真



1060

1040・1030

1010・1020

他